

| | |
|-------------|---|
| Title | 経済学者としての鎌倉昇教授 |
| Author(s) | 市村, 真一 |
| Citation | 経済論叢 (1969), 104(3): 202-204 |
| Issue Date | 1969-09 |
| URL | http://dx.doi.org/10.14989/133365 |
| Right | |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | publisher |

經濟論叢

第104巻 第3号

哀 辞

故鎌倉 昇教授遺影および原稿

| | | |
|-----------------|---------|----|
| 経営戦略について | 田 杉 競 | 1 |
| ニュースと「企業性」の接点 | 島 崎 憲 一 | 23 |
| フィスカル・ポリシーと完全雇用 | 森 岡 孝 二 | 41 |

記 事

鎌倉教授逝く

追 悼 講 演 (石川常雄・市村真一・堀江保蔵)

追 憶 談 (杉浦一平・吉田進・西村理・引馬滋)

故鎌倉昇教授略歴・著作目録

昭和44年9月

京 都 大 学 經 済 学 会

経済学者としての鎌倉昇教授

市 村 真 一

鎌倉教授は、わが国の経済学界において、異彩を放つ存在でありました。その談論風

発と、その特色ある不完全競争論と、オーソドックスな金融論と、そして多才にまかせて、日本経済の現実の諸問題を縦横に分析せる活動は、余人の追従を許さないものがあります。よわいわずかに不惑をすぎること4歳にして急逝したるにもかかわらず、既に著書11冊、編集書4冊、論文・エッセイに至っては、その主要なるものを数えても、60をくだらないのであります。処女作を、早くも大学院生一年の時に出版いたしましてよりの18年間より、外遊の約6年を除きますならば、12年にわたる学者生活の間、平均すれば、約1年に1冊の書物を著わし、且つ2箇月に1つの論文を執筆したことになります。そのエネルギーというよりは、その中に秘められたる克己心と努力は、非常のものであったと敬服のほかありません。

経済学者としての鎌倉教授の一生を回想いたしますと、2度の外遊によって、大きく3つに分れるように思われます。第1は、京都大学を卒業しましてより、スタンホード大学に2年半留学して戻ります昭和32年に至る7年間であります。この時期の鎌倉教授は、はじめは青山秀夫教授の研究室において、ついではスタンホード大学において、社会会計論、経済理論、金融論の各分野の基礎を、懸命に勉強されたのであります。この勉勵こそは、同教授が後年大をなされる素地でありました。

やがて同32年11月、経済学部助教授に任用されますや、同教授の学問的業績は、堰を切ったごとく、あふれ出て、教授の人生は第2期に入ったのであります。33年には、当時アメリカにおいて激しい論争をまきおこしていた独占や寡占をめぐる理論を、たくみに要約して、「価格・競争・独占」を書き、ベーシング・ポイント・システムや対抗勢力の理論を初めてわが国に紹介し、進んで不完全競争市場における不確実性の演ずる役割に説き及んだのであります。この年同時に彼は、7つの論文を執筆しましたが、これらは悉く、アメリカの貨幣・証券市場に例をとって、金融論の最近の諸問題を論じたものであります。翌年には、更に5つの金融論の応用に関する論文を書き、同時に「金融経済の構造」という書物を著わして、当時スタンホード大学のショー教授やガーレイ教授が、さかんに唱道していた金融資産の蓄積にともなう構成変化の意義を論じ、その応用によって、日本の金融市場の解明を試みたのであります。

しかしながら、この年の7月には再び渡米し、国連のニューヨーク本部において、モザック部長の下で、World Economic Surveyの先進国とくにヨーロッパ諸国の経済分析を担当して、3年をすごしたのであります。そして、この時期において、教授が得られた世界経済の諸問題に関する多くの知識と、国連本部を訪れる内外知名の士との交遊が、これ以後における第3期の教授の活動を、もっともユニークなものにしたと思われます。

もし注意して World Economic Survey の1959年より61年版までを見るならば、そ

には、鎌倉教授の独特の貢献の跡を見出せるでありましょうが、今それを果し得ぬことは、頗る残念に存じます。

やがて帰国せる教授は、再び陸続として、著書・論文・エッセイを発表し始めました。最近の7年間の著書、編書を列挙すれば、「日本経済論」「株入門」「社会人のための近代経済学」「現代企業論」「消費者ローン」「経済生活を動かすもの」「演習・近代経済学」「金融経済講座」などであって、論文エッセイに至っては、管見にふれたものだけでも約二十に及ぶのであります。これらを、今あらためて読み返しますとき、実に「鎌倉調」とでもいうべき、独自の観点と論調のあることに気づくのであります。「消費者ローン」から日米経済を比較したり、「経済を動かすもの」を物価問題の背後に見出そうとしたり、現代企業の多様な活動を、内外多くの事例によって、多彩に分析提示してみせたりしつつ、日本経済を解明して見せた手腕は、並尋常のものではありません。怜悯なる批評家は、その瑕疵を指摘しうるでありましょうが、しかもそれら数多くの論稿にあふれるかごとくもこまれている教授の、日本経済に対する情熱と博識には、叩頭せざるを得ないでありましょう。今日の日本の経済学界に人多しとはいえ、これだけ多くの分野にわたって多彩なる活動をなし得る人は、教授をおいては、殆んど無いと思われるのであります。更に言えば、教授の才幹力量は、決してこれらの文筆に表われたものだけではありませんでした。その言論、説得、交際、まことに多才でありました。その故に、教授は、余りにも多くの人に珍重せられ、余りにも多くの人にそのサービスを提供しました。息せくごとく書き、語り、行動した最近の彼を想い出すにつけても、強きかごとく見えて、反面心やさしく弱いところを持っていた学生時代の鎌倉君の姿と、処女作に「日常の経験と経済学との結附きに意を注いだ」と書き、主著に「理論と現実の架橋」をと認めた彼の志とが念頭を去来し、彼をいたわらざりし人々、又自からいたわること乏しかりし鎌倉君自身についての、言いがたい「やるせなさ」を感じるのであります。ここしばらくの彼を、今にして思えば、死を前にして、やるべきを一気にやろうとしていたかのごとき凄絶をすら感じる次第でございます。

私は、バリーの会議より羽田に戻りましたとき、彼の急逝を知らされ、言うべき言葉を持ちませんでした。個人的感懷や彼のエピソードについても、お話ししたいと思います。が、いまはただ一首の歌のみしるします。

エッフェルを仰ぎて

京都偲ぶるし

あの夕暮に

友逝きたるか